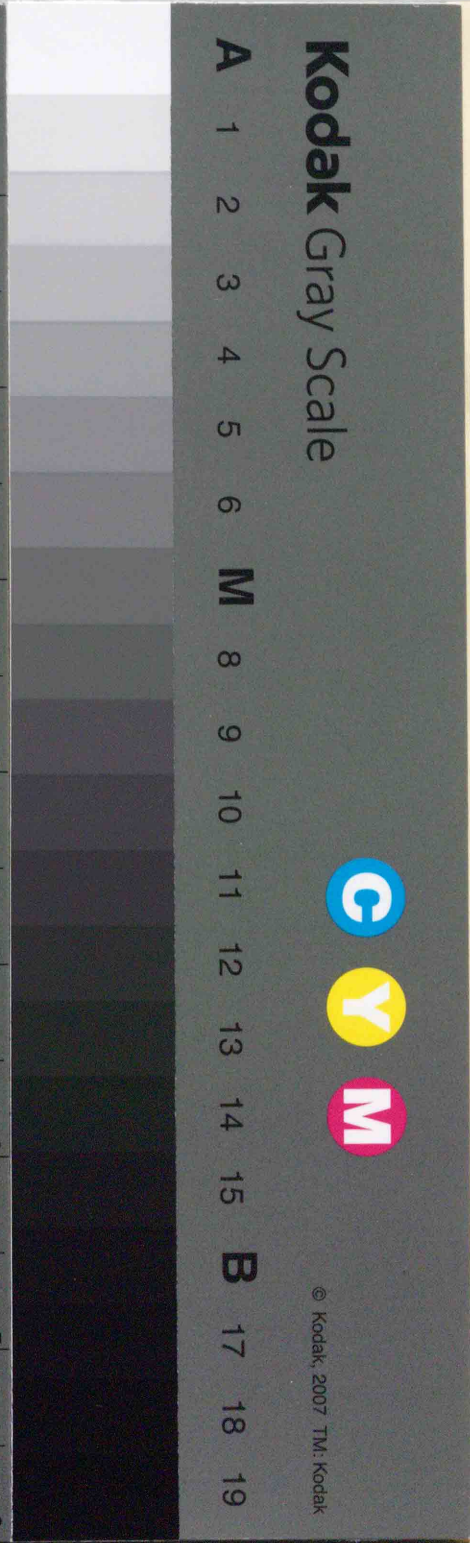
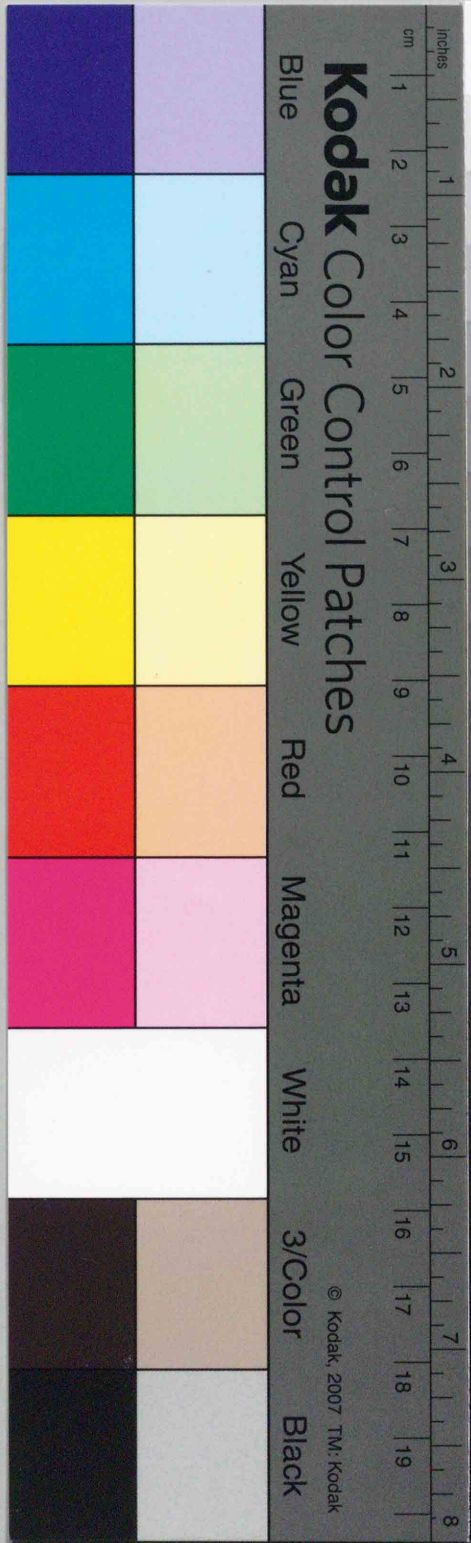
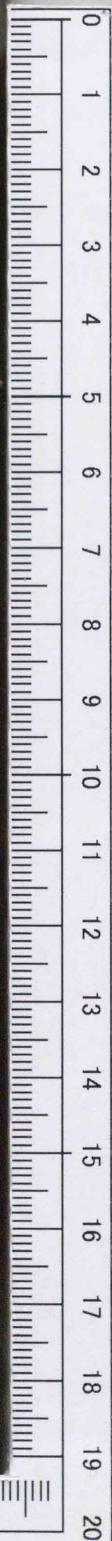


375.9
Tsw2
資料室



30212 ✓

教科書文庫

3
810
32-1900
200030 1434



資料室

明治三十三年十二月三十日
高等小學校國語科兒童用教科書
文部省檢定濟

文學博士坪内雄藏著

國語讀本

高等小
學校用

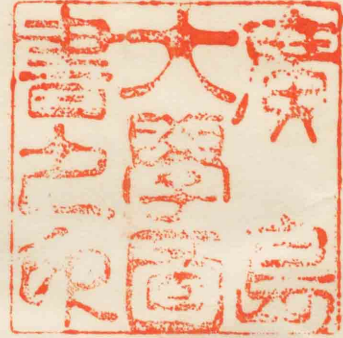
卷三

東京

合資
會社

富山房藏版

375.9
Tsu2



卷三目次

第一課	太陽	一	第十一課	孟子の母	二十三
第二課	都の花見の景況 を知らする文	二	第十二課	瀑布	二十五
第三課	熊野	五	第十三課	富士登山(上)	二十七
第四課	迂濶なる醫學生	七	第十四課	富士登山(下)	二十九
第五課	胃の腑の説諭	九	第十五課	短篇一束 <small>牙と摘 鹿わな 世は相もち</small>	三十二
第六課	食物	十一	第十六課	分業	三十三
第七課	動物の自衛	十三	第十七課	望遠鏡の發明	三十五
第八課	大塔宮吉野落	十六	第十八課	星ノ話	三十六
第九課	蜜蜂	十九	第十九課	少年駱駝御者	三十九
第十課	一家の經濟	二十一	第二十課	埃及のピラミッド	四十四
			第二十一課	物價の事	四十六
			第二十二課	貨幣及び爲替	四十八

國語讀本 高等小學校用 卷三

第一課 太陽

注意 米ハニハ出符
外ハニハ出符
漢ハニハ出符
若シハニハ出符
ハニハ出符
以テハニハ出符
要スルハニハ出符
アキモハニハ出符
合テハニハ出符
毎ニハニハ出符
シレニハニハ出符
同之リ

恩澤

被

太陽は、光と熱とを、地球に與ふる本源なり。地上の生物、一として、其の恩澤を被らざるものなし。

太陽は、絶間なく燃えて、光と熱とを發散す、甚だ大いなる球體なれども、地球よりの距離遠ければ、肉眼には、小さく見ゆ

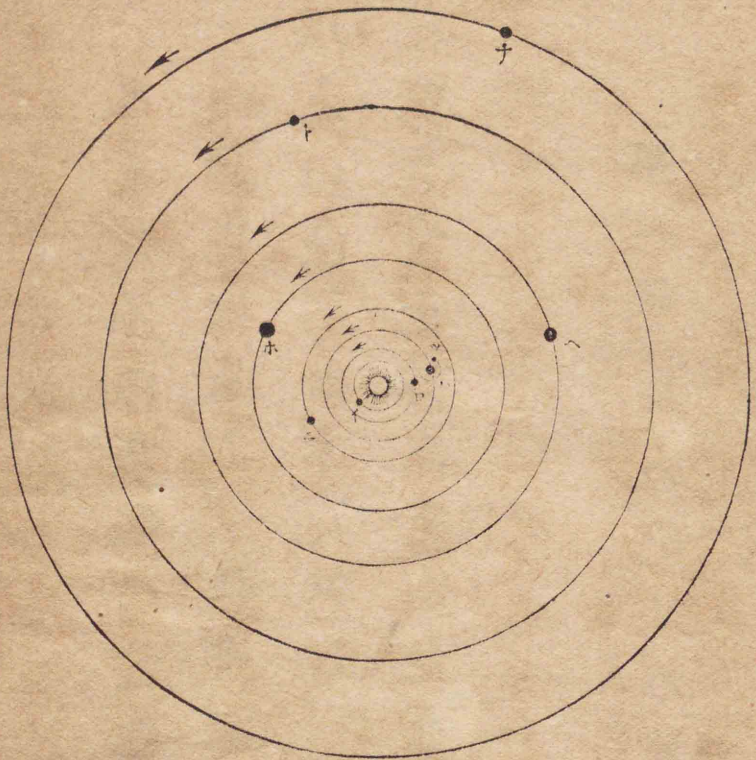
直徑
 なるなり。太陽の直徑は、凡そ三十五萬里と稱す。地球の直徑は、三千二百餘里なれば、太陽の直徑は、地球の直徑の百倍餘にあたり。

太陽は、かゝる大いなる火の球なれば、若し、地球などが、傍へ寄らば、すぐにも焼き盡さるべき程なれど、幸にして、地球と太陽とは、よき程に離れたれば、熱も光もおのづから、よき程にあたるなり。

星

關係

イ 水星
 ロ 金星
 ハ 地球
 ニ 火星
 ホ 木星
 ヘ 土星
 ト 天王星
 ナ 海王星
 ヨ 月



地球は、太陽の周圍を回轉する小さき星

の一たるに過ぎず。水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星など、皆、同類の星なり。此等の星と太陽との關係は、略

圖に示せるが如し。

* *
 春、夏、秋、冬の季候の變化は、太陽と地球との關係に基く。熱帶、寒帶などいふ地理上の區別も、亦た然り。草木のめぐみ、花咲き、實を結ぶも、亦た、太陽の餘澤なり。

第二課 都の花見の景況を知ら
 する文

最中

* 機嫌

* 脈

* 祭禮

*

春も、やう／＼最中と相成り候。祖母様御はじめ、皆々様、御機嫌よくゐらせられ候や。春の樂しさは、都田舎の隔てもなく候へど、取りわけて、都の花時に、上野向島邊の賑ひは、田舎の祭禮を、幾つもしよにいたし候様候。人力車、自轉車、騎馬など、目まぐるしき中を、鐵道馬車、あふるゝほど、人を載せて、絶えずゆき、致し候。上

開設

*

*

*

野の公園には、平生開設の博物館、動物園、パノラマなどの外に、花時は、常例の様には、美術品、工芸品の展覧會等開かれ、向島界限には、蕨箒張の掛茶屋、いくらもくく出來申候。花見の趣向、いらくく候うち、樂隊を先きに立て、紅白の運動帽を冠り、進行の歌をうたひて、立出で候は、學校生徒にて、小中學とも、大がい同じ様に

趣向

*

*

*

候。思ひつきのをかしきは、落語家連中、揃ひの扮装は、藝人會社員など、酒煙草化粧品類の廣告する人の扮装は、取りわけてをかしく候。向島の堤は、花の間は、車馬止にて、往來は、すこしもとぎれず、屋形船にて、隅田川を上る人々もあれば、ボートレースもあり。これは、弟たちに見せたく候。青白赤など色わけしたる短艇が、一

舵

齊に、舵を擧げ、波を蹴たて、漕ぎ競ふ様、まことに、勇ましく候。都の花見の賑ひは、とても、私の筆にては、寫し盡されず候まゝ、花時の寫真、数葉さしあげ候。御想像遊ばされたく候。味附海苔、一鑊、おめづらしくはなけれど、祖母様おすきゆゑ、相添へ申候かしこ。

想像

海苔

東京にて

やへ

第三課 熊野

*

看病

*

むかし、平家盛んなりし頃、大將宗盛（宗盛）の召使に、熊野（熊野）といふ、心だてやさしき女ありけり。或年の春、國もとの母、重病の由、言ひおこしければ、看病の爲め、身の暇賜はりたし、と願ひけれど、花見の折に、用あればとて、許されざりき。其のうちに、使、又來りて、母の命、今にも危し、と傳言す。

*

何卒

熊野は、心も狂ふばかり、氣をもみけり。
 折しも、宗盛召しければ、参りけるに、け
 ふは、天氣よければ、花見にゆくべし。準
 備して、供せよ。と言ふ。「かしこまりぬ」と
 答へけれども、つらさに、打ち萎れぬたり。
 宗盛、其の顔色の、常とちがふを見て、如
 何にしたるぞ。と問ふ。熊野、恐るく、母
 の病重りて、命危ければ、先頃も願ひし通
 り、何卒、御暇賜はりたし。といふ。宗盛は、

途 據

*

きゝもはてず、けふの花見すまば、隨意に
 せよ。只一日待てぬこともあらじ、とも
 かくも供せよ。といひて、車にて出かけぬ。
 據なく、車につきて、出でけるが、熊野は、
 途々思ふ様、花は、春くれば、又咲くものゆ
 ゑ、散ればとて、惜しからねど、二つなきも
 のは、人の命なり。命の絲は、一たびちぎ
 るれば、二たびとは、つなぎ難し。なさけ
 なや、此の世にては、もはや、母様に逢はれ

ぬか。と、人知らぬ涙にむせびけり。

さるほどに、宗盛の車は、清水寺に着き

境内

ぬ。廣やかなる境内も、うづまるばかり

に咲き亂れたるしだれ櫻、一重櫻など、美

しく、今を盛りの風情、譬へんに物なし。

宗盛は、盃をとりて、此のけしきをながめ、

腰元に、舞ひ歌はせて、楽しみけるが、はて

は、熊野にも、舞へ、といひつく。熊野は、か

なしさに、舞ひ歌ふ氣勢はなけれど、主人

是非

のいひつけゆゑ、是非なく、

いかにせん、都の春も、惜しけれど、

なれしあづまの、花や散るらん。

と、母の病氣の、且夕にせまれる由をほの

めかしつゝ、舞ひければ、聞くもの、皆、あは

れがりて、泣きけり。

思ひやり、薄き宗盛も、不便と感じてや、

即座

即座に、暇を與へければ、熊野は、取るもの

も取りあへず、その場より、旅立ちして、あ

づまの母のもとへ歸りけり。

第四課 迂濶なる醫學生

むかし、京都の一少年、醫學を修めんと

て、長崎に赴き、或和蘭人オランダに就きて、學びけ

記憶

るが、思ふ様、凡そ、學理は、必しも、常に記憶

する要はなし、寫しとゞめ置きて、用ある

時々、取り調ふれば可なりと。かう思

講義

ひければ、日々の講義はいふに及ばず、凡

そ、醫學の書類は、目にふるゝに任せ、ひた
すら、寫し取ることをのみ務めけり。

五年程たつうちに、寫本、數百卷に及び

けり。少年思ふ様、もはや、寫すべき珍書

もなし。我が學は成就したり。いざ、京

に歸りて、此の書類を取り調べながら、開

業せん。と。やがて、師に、別れを告げ、夥し

き寫本をば、行李イリに收めて、長崎の港より、

船に乗り込みけり。

かくて、日數經て、その船、玄海ケンカイ灘ナガを過ぐ
る頃、空模様、俄かに變りて、風荒れ、浪高く
なりぬ。船は、木の葉の様に漂ひ、乗客は、
生きたる心地もなし。さる程に、大浪逆
巻きて、船をおほふ、と見るうちに、艫トに積
める大小の荷物、皆、一度に押し流され、醫
學生の行李も、共に、行方しれずなりけり。
程經て、浪風をさまり、船は、馬關に着き
けるが、寫本一部も残らざりしかば、五年

＊ 悔

の苦學、あだとなりて、醫學生が智識は、都
を出でし時に異ならざりき。書籍のみ
をたよりにせば、かくの如き悔あるべし。

＊ 腑

ある時、目、鼻、口、手、足などが、胃の腑に對
して、不平をいだき、相談會を開いた。
先づ、口がいふには、胃の腑が、毎日、食物
を得るのは、悉く、我れくゝの力である。

第五課 胃の腑の説諭

懲 賛成

然るに、彼れめは、ゐながら、それを食ふばかりで、只の一言も、禮をいはぬ。失敬な自分勝手ではあるまいか。以後は、皆が働くことをやめて、あのなまけ者を懲らさうではないか。といふと、一同、聲を揃へて、**賛成**くと叫んだ。

視

そこで、足は、膳に近よることをやめ、手は、箸を取ることをやめ、鼻は、物を嗅ぐことを、目は、物を視ることをやめた。耳も、

四 後悔 誤 *

齒も、舌も、皆、めいく、なまけはじめた。かくて、二三日たつと、手足はなえ、目は凹み、肉は落ち、息は切れ、つまり、自分たちが苦み始めたゆゑ、一同、大いに驚き、これはまた、とんだことになった、と後悔し、又もや、相談會を開いてゐると、そこへ、胃の腑が来て、一同に向ひ、下の如く説得した。
一體、諸君が、僕を、自分勝手のなまけ者と見たのが、誤りの始めである。諸君が

消化

送られた食物は、からだ全體の爲めにな
るので、僕は、只、それを消化し、滋養分にし
て、諸方の血管に送る役廻りをしたばか
り。諸君の中に、其の養ひを受けなんだ
ものは、ない、受けたればこそ、健かに働く
ことが出来たのである。然るに、さうと
は思はず、一圖に、僕をそねみ、職分を怠った
のが、此の苦の原因。そこに、氣がついた
なら、今より、心を改め、めい、めい、職分を大

健

原因

協力

懇

事になさい。何事も、協力同心が肝要と、
やさしく、懇に説得した。
手も、足も、目も、口も、其の他一同、成程と
感服し、それからは、忠實に、めい、めい、の職
務を力めて、協力同心した、といふ。

第六課 食物

供給

飲食ノ目的ハ、身體ニ、滋養物ヲ供給シ
テ、體力、心力ヲ強壯ニスルニ在リ。身體

適宜
ヲ組織セル物質ハ、身心ノ働クニツレテ、
次第ニ消費セラル、道理ナレバ、適宜ニ
飲食シテ、コレヲ補フコト必要ナリ。然
ラザレバ、體モ、心モ、活潑ナル働キヲツ
クル能ハズ。

脂肪、澱粉、蛋白質
含
滋養物トハ、主トシテ、脂肪、澱粉、蛋白質
ナドイフ物質ヲ含メルコト多キ食品ヲ
イフ。イヅレモ、皆、人體ニ必要ナル物質
ナリ。但シ、カタヨリテ、其ノ一二種ヲノ

獸

ミ食スルハ宜シカラズ。
肉類ハ、概ネ、脂肪ト蛋白質トニ富ム。
卵、乳汁ノ類、マタ然リ。肉類ハ、獸肉、鳥肉、
魚肉等ヲ主トス。サレド、肉類ニハ、澱粉
質乏シ、故ニ、肉ト共ニ、植物性ノ食品ヲ食
フ必要アリ。
植物性ノ食品トハ、穀類、菜類、果實類ヲ
イフ、皆、澱粉質ニ富メリ。五穀、最モ滋養
ニ適ス。就中、豆類ハ、多量ノ蛋白質ヲモ

含ミ、米類ハ、多量ノ脂肪質ヲモ含ム。

身體ヲ養フニ、缺クベカラザル物質ハ、

以上ノ三物質ノ外ニ、尚ホアリ。骨ヲ造

ルベキ^{リン}燐^{サン}酸^{セキ}石灰^{クワイ}ノ如キ、是レナリ。菜類、

肉類ナドハ、コレ等ノ物質ヲ含有ス。

右ノ諸物質ニモ劣ラズ大切ナルハ、食

鹽ナリ。食鹽ハ、食物ニ、ヨキ味ヲ生ゼシ

ムルノミナラズ、血液ノ成分トモナリ、胃

液ノ素トモナル。

含 *

液 *

素

多ク、滋養物ヲ食フトモ、胃ノ力弱クシ

テ、消化スル能ハザレバ、効ナシ。故ニ、胃

ヲ強クスルヲ第一ノ心掛トナスベシ。

胃ヲ強クスル法ハ、第一ニ、食事ノ時刻及

ビ回数ヲ一定スル事、第二ニ、食物ノ種類

ヲ擇ブ事、變化配合スル事、第三ニ、食物ノ

分量ヲホドクニスル事、第四ニハ、程ヨ

ク運動シ、休息シ、睡眠スル事ナリ。甚シ

ク熱キモノ、又ハ、冷キモノヲ食フベカラ

擇 *

息 眠

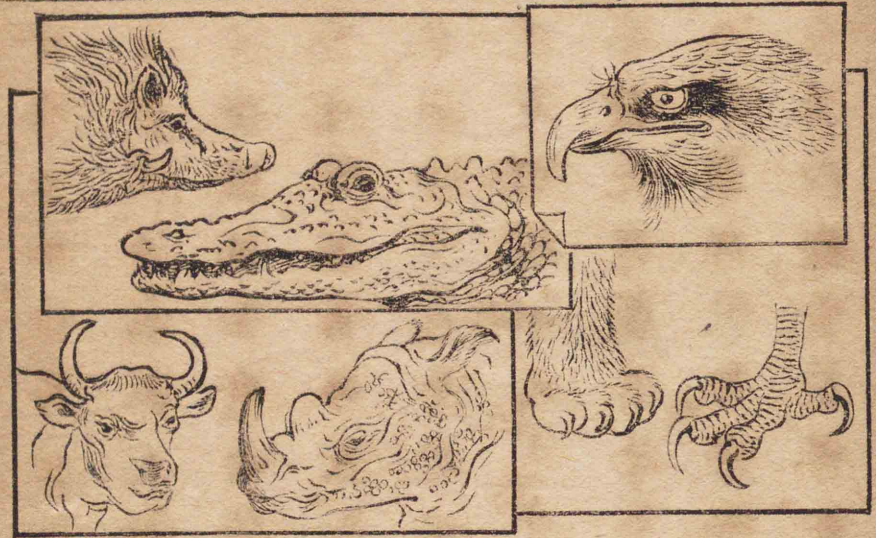
論 高利生 卷三

非ズ。ヨク嚼マズシテ食フ、マタ、非ナリ。
 諺ニモ、命ハ、食ニアリ。トイヘリ。宜シ
 キヲ得ザル飲食ハ、百病ノ源トナル。慎
 マザルベカラズ。

第七課 動物の自衛

鷹 獅 鷹牙
 犬に牙あり、牛に角あり。鷹には、嘴と
 爪とあり。獅子、虎の如き猛獸に至りて
 は、更に鋭き爪、牙を具へて、身を護り、敵を

鷹 禽 * 殼 猛



斃す。牙、角、嘴、爪等は、
 禽獸の武器なり。
 動物の中には、武器
 を有せざるも少から
 ねど、相當の自衛法を
 具へざるはなし。さ
 ざえ、蛤の如きは、行歩
 も自在ならねど、貝殼
 に潜むときは、猛き魚

讀 本 高等斗生走用卷三 十四 富山号 版

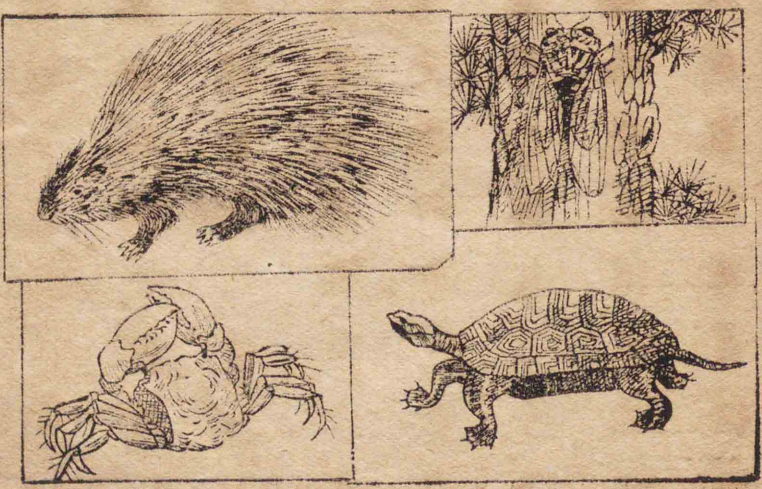
論 州 利 行 卷 三 富 山 片 齋 片

例 鎧 雙

すらも、襲ふ能はず。蝦蟹エビカニ、龜、甲蟲の類は、
た然り。これらは、鎧を被りて、敵を防ぐ。
尚ほ、面白き自衛法あり。例へば、松に
鳴く蟬の、その色、松の皮に似たる、ひきが
へるの、土色をなせるなど、是れなり。敵
来りて捕へんとするも、周圍の色にまぎ
らはしき故に、とらるゝこと少なし。
北國に住む野兔は、毛の色、夏は、土の如
く、又は樹の枝の如く茶色なれど、冬は、雪

窮 濁

の様に白くなる、とぞ。
これまた、前と同様の
自衛法なり。
鳥賊イカは、敵にあへば、
墨汁を吐き、周圍の水
を濁らせて、身を匿す。
鼪イナズは、窮すれば、惡臭を
放ちて、敵を防ぐ。雁、
鴨カモなどは、群居して生活し、眠る間には、見



讀 本 高 等 科 生 活 用 書 三 十五 富 山 片 齋 反

哨兵 張番をおくこと、軍隊が哨兵を置くが如し。

※ 最高等動物たる人類は、腕力も、甚だ強

からず、角もなく、鋭き牙もなし。また、甲

殻なく、周囲の物にまぎらはしき色もな

く、自衛の具、甚だ少なし。然れども、智力

秀でたれば、工夫して、武器を作り、且つ、よ

く和親協力して、他の動物に當る。是れ、

如何なる猛獸、毒蛇も、人間に敵する能は

蛇

協力

殻

※

哨兵

※ 驅 ずして、次第に驅り立てられ、山奥、野の末
にのみ、辛うじて、その生を保つ所以なり。
智識と協和とは、人類の最大利器なり。

第八課 大塔宮吉野落

命の綱と頼みたる

吉野の城も、今は、早や、

あらしの前の花なれや、

とても散るべきものならば、

※ ※ ※

言本
高平利生伝巻三
富山彦藏版

覺悟

いで、潔く散らばやと、
宮は、覺悟をきめたまふ。
主従あはせて、幾十騎、
雲霞の如き敵中へ、
命なげすて、切り入れば、
敵はこらへず、追ひたてられ、
谷間くへ逃げ下る、
風に、木の葉の散る如く。
さもあれ、敵には新手あり

*

最期

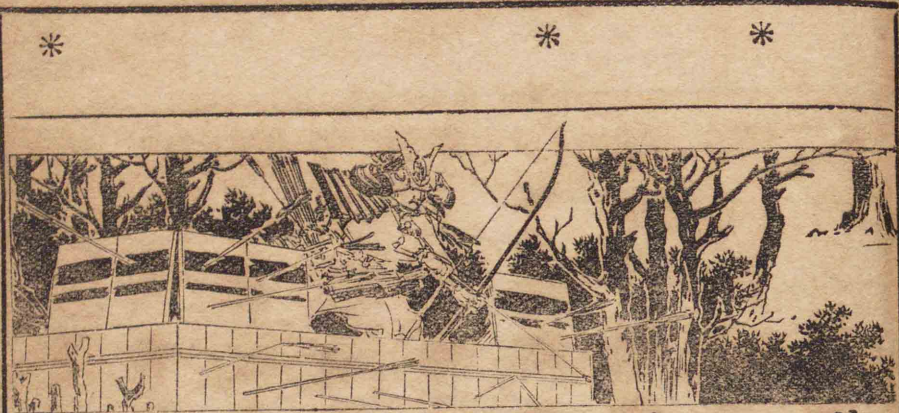
入りかはり、また攻め寄する、
長く防がんすべもなし。
藏王堂の大庭に、
宮、一同を集めさせ、
最期の酒宴を張らせらる。
かゝる折しも、かけつくる
村上彦四郎義光、
手傷、きびしく負ひながら、
宮の御前にひざまづき、

賣本
高平利生伝巻三
十七
富山彦藏版

言本 正徳和名後月卷三 富山房藏



「はや、事急なり。恐れながら、御直垂ロミタレや、御鎧、ぬがせられて、賜はれよ、はやくく。」とす、むれど、いかで、さること。忠臣を、ひとり残して、落ちんや」と、聞き入れたまふけしきなし。義光、大きに氣をいらち、國の安危を、一身に



荷ふ御身ぞ。むざくと、こゝにて、御最期あるべしや。是非、落ちたまへ。」といひつゝも、御物の具の紐を解く。宮、げにも、とやおほしけん、直垂、鎧、ぬがせられ、我れ、若し、生きて、世にあらば、汝があとを吊はん。死なば、あの世で逢ふべし。」と、

讀本 高等科生徒用卷三 十八 富山房藏

富山房藏版

涙ながらに、落ちたまふ。

御影遠くなりし時、

宮のめし物、身に着し、

櫓に現れ、大音聲、

「大塔宮は、我れなるぞ。

最期のさまを見おけや」と、

腹かききつてぞ、うせにける。

「すはや、宮には、御自害ぞ。

我れ、首とらん」と、敵兵ばら、

* * *

*

圍み亂して、つどひくる。

さわぎにまぎれ、つゝがなく、

宮は、吉野の山ごえに、

天の川へぞ、落ちたまふ。

第九課 蜜蜂

蜜蜂ハ、モト、群ヲナシテ、山野ニ栖ムモ

ノナルヲ、蜜ト蠟トヲ取ル爲メ、人家ニテ

モ、飼養ス。

飼 栖

富山房藏版

雌雄

蜜蜂、一群ノ數ハ、多キトキハ、千ヲ以テ數フ。ソノウチニ、三種ノ蜂アリ、雌蜂、雄蜂、工蜂、是レナリ。

雌蜂ハ、只一頭アルノミ、女王ト名ヅク、群中ノ頭ナリ。雄蜂ト共ニ、巢ニコモリ居テ、子ヲ生ム。雄蜂ノ數ハ、間、數百頭ニ及ビ、四五月頃ノ五六十日間生存ス。巢ヲ造リ、食物ヲ集ムルナドハ、スベテ、工蜂ノ務ナリ。其ノ數、最モ夥シ。

*

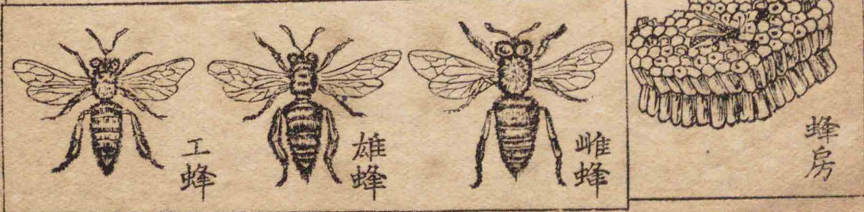
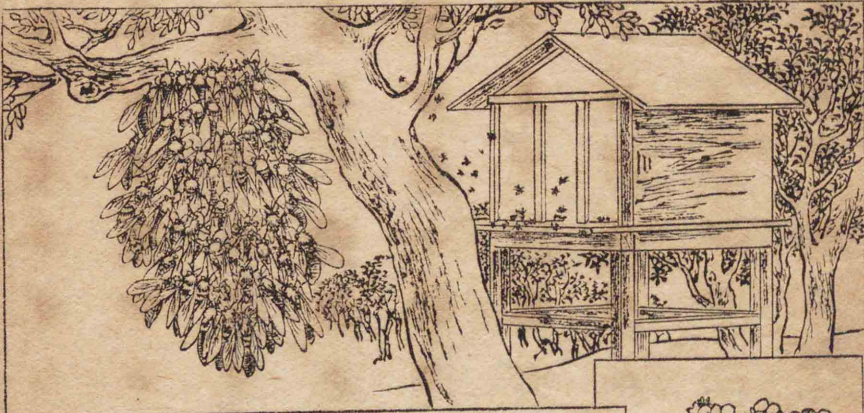
工蜂ハ、雌蜂、雄蜂ヨリハ小サケレド、其ノ羽根強ク、カヒトシク飛ビマハリテ、花ヲ求メ、蜜ヲ吸ヒ取りテ、巢ニ運ブ。一足ノ工蜂ガ、運ブ蜜ノ量ハ、僅カナレド、數千足ガカヲ合セテ、日々急ラズ運ブ故ニ、其ノ結果ハ、頗ル大ナリ。彼等ガ、一年間ノ食料ハ、實ニ、カクシテ貯ヘラル、ナリ。工蜂ハ、ソノ體內ヨリ、蠟ヲ分泌シ、之レニ、種々ノ物質ヲマシヘテ、巢ヲ作ル。巢

分泌

*

言
本
高等科生
富山県
富山県

筒
ノ内部ニハ、蜂房、數
多アリ、六角形ノ、小
サキ筒ヲ組ミ合セ
タルガ如シ。房ハ、
間毎ニ隔障アリテ、
相支へ、各房ノ底ハ、
三葉ノ菱形片ヲ綴
ヂ合セタルガ如シ
其ノ構造ノ巧妙ナ



綴片 支 隔障

ルコト、人工ニモ優ルホドナリ。

澆
此ノ巢ノ中ニ貯へタル蜜ヲ取り、澆シ
テ、精製セルヲ、蜂蜜ト云フ。其ノ色黄ニ
シテ、粘リケアリ、味甘シ。食料ニモ、醫藥
ニモ用ヒラル。又、巢ヨリハ、蠟ヲ取ルコ
トヲ得、コレヲ、蜜蠟ト云フ。或ハ、膏藥ノ
膏
料トナシ、或ハ、蠟燭ヲ作ルニ用フ。

第十課 一家の經濟

讀本
高等科生
富山県
富山県

* 奢侈 經濟 *

千丈の堤も、蟻の穴より崩る。といふ諺あり。萬金を貯へたる財産家も、奢侈に耽りて、經濟を誤るときは、遂に貧窮に陥るべし。况や尋常の家々をや。衣食の如き、日々の入用に關するものは、取りわけて、慎まざるべからず。些少の出費なりとて、氣をゆるさば、知らぬ間に、積もりく／＼て、驚くべき多額となるべし。慾は募り易く、限りなし。一たび慾

釀 奢

整理 任

に負けて、奢侈の習慣を釀さば、募りく／＼て、身分不相應の奢りをなし、果ては家産を傾くるに至るべし。經濟の要は、身分相當の家計を立つるにあり。而して、家計を整理する主任者は、男よりも、女なり。蓋し、一家の主人、即ち、夫たる人は、それ／＼職掌ありて、大抵、外出がちのものなれば、家計の整理は、主として、妻たる者の任となすべきなり。

富山県立富山高等学校蔵

簿

超過
調査

一家の支出は、豫め、其の収入に應じて、相當の額を定め、帳簿を備へおきて、衣食、薪炭等、日々の雜費を記入すべし。月末には、當月内の出入を計算し、年末には、一年間の決算をなし、支出の總高が、最初の豫算に超過せしか、否か、を調査すべし。又、病氣、火災などの如き、思ひがけぬ出來事ありて、不時の支出を要することあり。常に、餘財を貯蓄して、かゝる用に備

ふべきなり。

第十一課 孟子の母

孟 住む家、墓場に近ければ、見なれ、聞きなれ、朝夕に、孟子は、友達集めつゝ、葬禮ごととして、遊びけり。母、これを見て、歎息し、「朱に交はれば、赤し」とか、をさなき者は、はた次第、かゝる處に住むときは、わが子のためによから

* 歎息 朱

讀本 高等科主走用卷三 二十三 富山県立富山高等学校蔵

論
富山
富山

ずと、急ぎ、住居を移しけり。

住む家、市に近ければ、見なれ、聞きなれ、此のたびは、客呼ぶまねや、ねぎるまね、商ひごととして、遊びけり。こども、我が子に不為めぞと、またひき移る新借屋。

学校まぢかなりければ、教へざれども、いつとなく、ならふ読み書き、人の道、行儀よくして、遊びけり。母は、

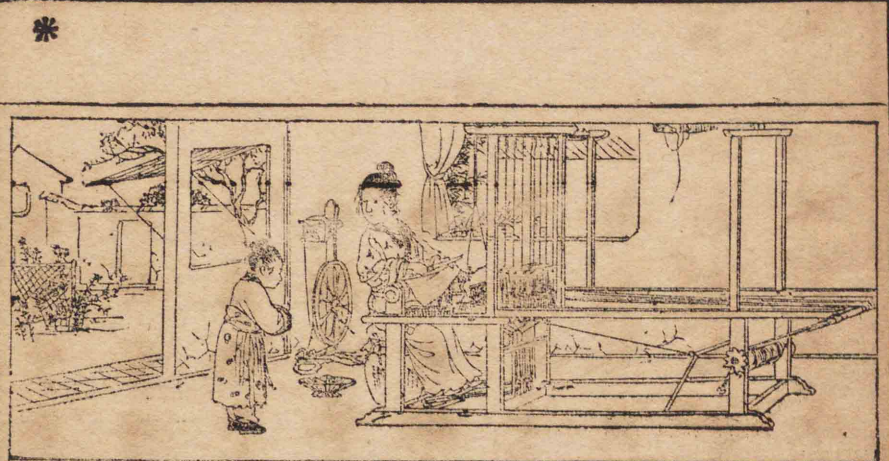
やうく、安心し、そこを、住居と定めつゝ、送る春秋、幾めぐり。

かくて、孟子はおひたちて、他郷に、遊學なしけるが、ある年、母の戀しさに、學問休みて、歸りくる。

折しも、機を織りゐたる、母は、見返り、何故に、歸り來りし、學問は、其ののち、いかほど進みしと、詰られて、孟子、おどくと、まだ、いか程も、進まね

讀本
高等科主走用卷三
二十四
富山

詩
六
一
宮
レ
戸
扉
片



と、母様戀しく、それ故」とい
へば、母親、けしきをかへ、か
たへの又物とりあげて、織
りかけし機を断ちきりぬ。
「こは何事」と驚けば、母は、
かたちを改めて、「これ、此の
機をよう見よ。今断つと
きは、きのふまで 織りしは、
すべて、あだとなる。 學びの

* 撓 *

道も、その如し、中途に、心撓みなば、
多年ならひし學問は、皆、いたづらと
なるべきぞ。おろか者め」と叱りける。
孟子恥ぢいり、その後ちは、心入れ
かへ、一心に、學問修め、賢人のほま
れを、世々に残しけり。

第十二課 瀑布

蔭

谷川の早瀬にそひて、松、杉、楓などの蔭

賣本
高等斗生走用卷三
二十五
富士号版

言 下 山 房 藏 片

路 不 か き 山 路 を 登 り ゆ け ば 山 愈 高 く して

* 路 益 峻 しく 行 手 の 方 に 遠 雷 の 如 き 響 聞

* こ え 登 り ゆ く に 隨 う て 其 の 音 次 第 に 近

* づ く か く て あ へ ぎ 登 る こ と 半 町 ば か

澤 り に して 遂 に 一 大 瀑 布 の 下 に 出 づ

震 絶 壁 す さ ま じ き 響 は 山 岳 を 震 ひ 數 丈 の 絶

壁 更 落 ち 來 る 水 の 勢 ひ た と へ ん に 物

なく 岩 も 碎 か れ 地 も 穿 た る か と 疑 ふ

龍 壺 の 深 さ は 知 る べ か ら ず 落 ち くる

濛々 水 は 相 撃 ち て 水 煙 八 方 に 飛 散 し 中 ほど

より 以下 は 霧 の 如 く 濛 々 たり 日 光 こ

れ に 映 ず れ ば 虹 の 如 き 色 を 現 ず う つ

く しく 心 地 よ く い さ ま し

崖 か く の 如 き は 瀑 布 の 一 例 な り 瀑 布

に いろ く あり 斷 崖 を 直 下 せ ず して

急 坂 を す べ り 落 つ る も の も あり さ ら

激 場 合 に は 水 激 せ ず して さ ら さ ら と 走 り

下 る 譬 へ ば 多 く 白 糸 を 投 げ か け た る が

賣 本 高 等 科 生 徒 用 本 三 二 十 六 富 山 号 藏 版

富士山 御殿場 第一 富士山 御殿場 第一

練

如く、練絹を布きたるが如く、水晶の簾を吊りおろしたるが如し。

紀伊の那智、下野日光の華嚴等は、我が國の大瀑布なり。

想*

世界第一なるは、北米合衆國のナイヤガラナイヤガラの瀑布なり。この瀑布、中央に島あるゆゑ、水二つに分かれて、流れ落つ。高さ、各二十八間、幅合せて三百三十間あり、といふ。その壯絶なる様、想ふべし。

第十三課 富士登山 (上)

富士山に登るには、毎年、七月の始めより、八月の中頃までを可とす。この間には、山頂の雪も消ゆればなり。登山の路、四あり。駿河スルガの方に三甲カ斐ヒの方に一、その中、駿河の須走スソより登るを通例とす。東京新橋の停車場より、汽車にて、西行すること、五時間にして、駿河國御殿場の

賣本 高等科生走用卷三 二十七 富士山 御殿場 第一

言
二
一
富山房藏片

驛々
茫々

驛に着く。御殿場より、二里許、茫々たる裾野の草を分け行けば、須走驛に達す。

この邊は、海面よりも高さこと二千六百尺なれば、盛夏の氣候すらも、春の如し。

それよりは、強力チカラを雇ひて、進むを例と

す。強力とは、旅客の荷物、食糧等を脊負

ひて、道案内をなす者なり。行くこと、二

嶮阻

里にして、茶店あり。是れより、嶮阻にし

て、馬通はず、故に、こゝを、馬返ウマガエといふ。

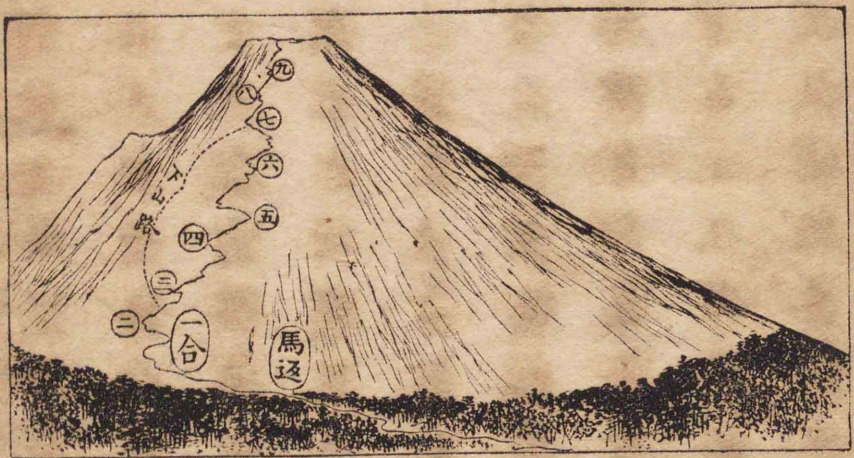
*
食糧

*

*
杖購

眺

草



一里ばかり登れば、金剛杖を賣る處あり、購ひて、進む。草も樹も、漸く、短小となる。遙かに眺むれば、草色、煙の如く、大空の雲に接す。近づきて見れば、蓬モウギの如き短き草、處々に散點す。やがて、大石を積みて、

賣

馬返斗生用卷三

二十八

富山房藏片

四壁と屋根とを造れる一の室を見る。
こゝを、一合目といふ。これより頂上まで、凡そ十町毎に、石室あり、二合目、三合目などと稱す。

登りくゝて、五合目、六合目を經て、七八合目に至れば、路甚だ嶮し。空氣次第に稀薄となりて、呼吸切迫し、流汗、雨の如く下る。八合目に達する頃、遙かに、山麓を顧れば、暮色、漸く、群山を埋め、日、將に沈ま

んとして、富士の影、半腹の雲に浮ぶ。

八合目の石室に入りて、一宿す。室内は、板と蓆とを布

きて、床となせり。寒さ烈しければ、焚

火して暖を取る。かゝる高地にては、空

氣稀薄なれば、薪、よくは燃えず、飯も、よくは煮えず。



言部
富士山
第十四課
富士登山
下

第十四課 富士登山 (下)

晴朗

寒さに、眠られねば、翌朝、早く起きて、室外に出づ。四面は暗黒なれど、中天は晴朗にして、星、常よりも明かに見ゆ。既にして、東方微かに白み、紫色の筋の棚引く、と見るうちに、淡紅となり、深紅となる。見るく、金光、雲を破りて、迸り出で、天の一方を射る。既にして、深紅の雲は、變じ

*

微

塊

洞

*

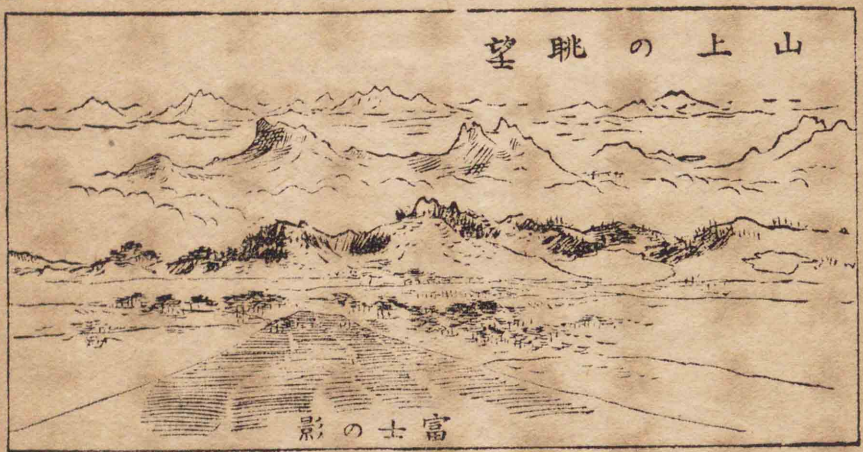
て、黄玉色となり、其中より、溶解したる銅の塊か、と思はるゝもの、躍り出づ、これ、太陽なり。此の時、天地、全く明かとなる。日の出を見了りてのち、更に、頂上に向ひて、上る。道の嶮しき、甚しく、岩角は、尖がりて、劍の如し、幾たびも、鞋を代ふ。呼吸、益、切迫し、寒さ、身に透る。九合目を經て、始めて、絶頂に達す。絶頂には、一大洞あり、噴火口の跡なり、

賣
六
富士山
三十一
富士山
岩

* 深さ五十餘尺、その周邊に、萬古の雪を湛
 * ふ。周邊、凡そ二十餘町、八峯、劍の如く立
 * ちて、これを圍む。洞穴の側に、金明水、銀
 * 明水といふ二つの泉あり。又、富士神社
 * あり。社頭に立ちて、下の方を望めば、南
 * は、東海道一帶の陸海、山嶽は、土塊の如く、
 * 湖沼は、盆池の如く、長河は、銀の絲に似た
 * り。蒼海は、茫々として、天に連り、水陸は
 * 只一筋の白沙を以て、境をなすのみ。後

蒼海

毫



方は、東山、北陸の大山嶺
 群り立ち、加賀の白山、越
 中の立山、信濃の御嶽、淺
 間山など、呼べば、殆ど應
 へんとす。
 これより、嶽を下る。
 下るときは、すべる様に
 て、毫も、路の峻を覺えず。
 七合目より、麓までは、悉

言本
高年利生後月卷三
富山房藏

踏 鏢 堅
く、砂路なり。金剛杖を立て、強く砂を踏めば、自然に、人を載せて走る、殆ど、止まる處を知らず。風は、飄々と、衣髪を翻し、身は、さながら、天空より墜つるもの、如く、二時間にして、山麓に達す。

聳 顧*
かくて、馬返に着き、須走を經、やがて、御殿場に至りて、顧れば、端然たる山容、大空に聳え、白雲しづかに、山腹にかゝりて、さながら、我れを送るもの、如し。

第十五課 短篇一束

矛と楯

堅牢 貫突
むかし、矛と楯とを造りて、賣る者ありき。その矛の鋭きを誇りて曰はく、この矛をもて、突かば、鐵石も貫くべし。また、其の楯の堅牢なるを誇りて曰はく、いかなる箭も矛も、此の楯を以てすれば、防ぐを得べし。と。或人語りて曰はく、さら

續
三十二
富山房藏

言本 高等科生後月卷三 富山房藏版

ば、汝の矛をもて、汝の楯を突かば、いかにと。 賣る者、口ふさがりぬ。

鹿わな

わなをふせて、鹿を捕りし者ありけり。 わなにて、捕りたるは、名譽にならねば、射たり、といつはりて、ほめられん、と思ひ、雁股の矢を番へて、其の鹿を射けるに、鹿には當らで、わなの綱を射切りければ、鹿は、忽ちのがれ去りぬ。 この男、足ずりすれ

どもかひなし。

世は相もち

目くらと、おしと、ゐざりと、一つ家に住みて、興來れば、ゐざり歌ひ、目くら弾じ、おし起つて舞ひけり。 いづれも、楽しげなり。 或夜、隣家に、火事起こりぬ。 三人、あわてふためきて、遁れんとすれど、能はず。 人あり、教へて曰はく、目くらは、ゐざりを負へ。 おしは、これを導きて、逃げよ。と。 三人

續 高野斗室遊月卷三 三十三 富山房藏版

免 これに従ひ、遂に、難を免るゝを得たりき。

第十六課 分業

商店ニテ、價五錢ニ賣ルホドノ團扇ハ、美シキ繪ナドカイタル、相當ニ念入りノ品ナルベシ。今、其レト同ジホドナルヲバ、自力ニテ造ラントセバ、如何。晝夜ヲ兼ネテ造ルトモ、製造高、一日、五本以上ニ出デジ。サテ、ソレヲ、小賣五錢ノ割ニテ、

卸 問屋ニ卸サンニ、原料ノ費用ト、手間賃ト

* ヲ引キテ、相當ノ利潤アルベシヤ、否ヤ。

恐ラクハ、損ト得ト、相償ハザルベシ。

團扇ノ製造所ニ行キテ見レバ、數多ノ職人アリテ、手分ケシテ、事ニ從フ。竹ヲ削リテ、骨ヲ造ルモノアリ、紙ヲ張ルモノアリ、繪ヲ刷リ出スモノアリ。只一本ノ團扇スラモ、數人ノ分擔ニヨリテ、成ルナリ。コレヲ、分業法トイフ。而シテ、ソノ

削 刷

言水
高等科生後月卷三
富山房藏版

出来モ、其ノ仕上ゲノ速サモ、到底、一人ニ
テ造ル時ト、比スベクモアラズ。是レ、隨
分、手ノカ、リタル品ノ、割合ニ、廉價ニ賣
捌カル、所以ナリ。

蓋シ、分業法ニヨリテ、事ヲナサバ、第一
ニ、時間勞力ヲ省クヲ得ベク、次ニハ、職人
ヲシテ、一事ニ專ラナラシムルガ爲メニ、
自ラ、其ノ技ニ、熟達セシムルヲ得ベシ。
要スルニ、分業ト協同トハ、文明生活ノ

必須
必須法ニシテ、譬ヘバ、車ノ兩輪ノ如ク、偏
廢スベカラザルモノナリ。

第十七課 望遠鏡の發明

今より、三百年ほど前かた、和蘭國に、或
貧しき眼鏡師ありき。その幼きむすめ、
或日、仕事場に遊び居しが、如何にしけん、
俄かに、聲をあげて、父上へ、あれ、あの塔
の、近く見ゆることよ。と、叫びたり。怪み

讀本
高等科生後月卷三
三十五
富山房藏版

言本 高等科生後月巻三 富山府立

て、近より見しに、少女は、眼鏡に用ふる玉を、一つ宛、左の手に持ち、左手なるを遠くし、右手なるを近よせて、それを透して、かなたの寺の塔を望み居たり。その玉を調べけるに、右のは、半面平に



して、半面は凹みたり、又左のは、半面平にして、半面は凸かなりき。眼鏡師は、不思議に思ひて、自ら、件の玉を取りて、少女の爲し、如く、幾たびも試みけるが、遂に、凸凹の玉を程よく隔て、透し見れば、遠きものをも、近く見得べき由を悟りぬ。かくて、工夫を凝らし、末に、厚紙にて、筒を造り、數箇の玉を箝め込みたるものを作りけるが、これ、やがて、今の望遠鏡の

讀本 高等科生後月巻三 三十一 富山府立

起源なりき。天文學の進歩は、主として、望遠鏡の賜なりと思へば、此の發明の功、大なり、といふべし。

第十八課 星ノ話

恒星 輝 仰

ヨク晴レタル夜ニ、仰イデ、空ヲ望メバ、大小無數ノ星ノ輝ケル様、サナガラ、寶玉ヲ散ラセルガ如シ、天文學者ノ研究ニヨレバ、コレヲノ星ニハ、恒星、遊星、流星、彗^{スイ}

*

星等ノ數種アリ。

距離

恒星ハ、大ナル星ニテ、自ラ、光ヲ放チテ、輝ク。太陽モ恒星ノ一ツナリ。他ノ恒星ノ、太陽ニ比シテ、甚ダ小サク見ユルハ、ソノ距離ノ、甚ダ遠キガ爲メナリ。遊星ニハ、光ナケレド、恒星ノ光ヲ反射シテ輝キ、常ニ、其ノ周圍ヲ旋轉ス。地球ヲハジメ、水星、金星、火星、木星、土星ナドハ、皆、太陽ノ周圍ヲ旋ル遊星ナリ。他ノ遊

* 星ニ附屬シテ、ソノ周圍ヲ旋ルモノヲ、衛
星トイフ。月ハ、地球ノ衛星ナリ。

閃々
恒星ハ、自ラ光ヲ放ツガ故ニ、其ノ光、閃
々トシテ輝ケドモ、遊星ハ、自ラ光ヲ放タ
ザレバ、ソノ光、靜カナリ。恒星ト遊星ト
ハ、カクシテ、見分クルヲ得ベシ。

* *
又、往々ニシテ、天ノ一方ヨリ、忽然、光ヲ
引キテ、現ルト見ル間ニ、他方ニ流レ去リ
テ、影ヲ失フ星アリ。ソハ、小サキ星ガ、地

* 球ノ引力ニ、引キ寄せラレテ、落ツルトキ、
空氣トスレアヒテ、燃エ光ヲ放ツナリ。
カ、ル星、折々ハ、地上ニ落ち來ル。拾ヒ
テ、檢スルニ、ソノ質ハ、概シテ、鐵、又ハ、
け
るナドナリ、トゾ。

幕
彗星ハ、ソノ形、幕ノ如ク、長ク尾ヲ引キ
テ、天上ニアラハル。

* 銀河ハ、俗ニ、天ノ川トイフ。大空ニ、帶
ノ形ヲナシテ、横ハレリ。コレハ、無數ノ

小サキ星ノ群集セルナリ。

以上、各種ノ星、ソノ大小、遠近、一様ナラズ。大ナルモノハ、太陽ヨリ、遙ニ大ナルモアレド、ソノ距離遠ケレバ、微小ニ見エ、中ニハ、肉眼ニテハ、見ルベカラザルモアリ。望遠鏡ヲ以テシテモ、尚ホ、認メ難キモノサヘアリ。大空ノ、イカニ大ニシテ、星ノ數ノ、イカニ無量ナルカヲ想フベシ。

第十九課 少年駱駝御者

むかし、亞刺比亞の或町に、ハッサンといふ妻子のある駱駝御者がありました。

隊商連と一し、に、大沙漠を通過して、スエズへ往復するを、生業として居ましたが、或時、スエズから妻の許へ、我が子のアりに、駱駝をつれさせて、荷物を取りによこせ、といひ送りました。妻は、ア리가、幼い身で、慣れぬ旅に赴く

* を心懸りには思つたなれど、人中へ出すも、一つの修業と思ひ、旅立ちの準備をさせました。

※ アリは、旅に出るのが、珍しさに、嬉しくてなりませぬ。年頃飼ひならした、おとなしい駱駝に乗り、飲用水を、壺につめ、隊商の仲間に加はつて、勇ましく出立しました。

隊商等は、途々も、いろく、面白さうに

* 話をしながら行けど、アリは、話相手もなければ、駱駝のみを、友にして、一日も早く、父に遇ひたいと、願ふのみであつた。

* 熱帯地方のこととして、太陽は、はげしく照りつける、暑さは、焼く様で、沙漠は、一面に、きら／＼と光る。どこもく、沙漠ばかり。晝頃になつて、やう／＼、僅かばかり

※ 湧きの木蔭と泉とがある處に着いた。そこで、暫時休んで、湧き出づる清水に、渴をい

* やし、曇の水をつめかへ
などして、又、出かける。
そのうちに、日が暮れる
と、一同は、天幕を張って、そ
のなかで、一夜を明しま
した。

翌日も、其の翌日も、同
じ様にして、四日目にな
た。すると、その正午頃



* 掩
に、熱い風が、俄かに吹き起って、砂煙は、空を
掩ひ、天地がまっくらになつたゆゑ、一行は、已
むを得ず、進行を止めた。

痕
暫くして、風もやみ、砂もしづまったが、困
たことが出来た。今までは、駱駝の通つた
足跡をたよりに、進んで来たのに、風で、蹄
の痕が消えたゆゑ、方角がわからなくな
り、右へ往つては、左へもどり、左へ往つては、右
へもどり、一つ處にのみ、さまよつて居た。

言 平 高 等 科 生 徒 用 卷 三 富 山 房 藏 版

その中に、壘の水は無くなつたが、水を得る
よすがはない。一行は、互に、顔を見合せ
て、途方に暮れました。

沈 睡
そのうちに、日が沈んだ。アリは、晝の
疲れで、睡るともなく、うとくと睡りま
したが、ふと目を覺ますと、人々の話聲が
聞こえる。一人が「いふ、もし、あすのうち
に、水のある處に着かなければ、止むこと
を得ぬ、駱駝を一疋殺して、その胃の中の

水を飲むことにしよう。又、一人、それに
は、誰れの彼れのと「いふより、アリと「かい
ふ子供のを殺すことにしよう。」といふ。

＊ ＊ ＊
アリは、胸を貫かれた様に驚きました。
不便や、あすまで、かうしてゐれば、駱駝は
殺されてしまふ。もう、寸時も猶豫はな
らぬ、と思つた。そこで、人々の熟睡するを
待つて、そつと、駱駝を曳き出し、急いで、それ
に乗つて、蹄を早めて、逃げ出した。

續 本 高 等 科 生 徒 用 卷 三 四 十 二 富 山 房 藏 版

高麗和名後月三
富山月三

晴れ渡った空には、無数の星がかゞやいて居た。アリは、幸にも、どの星が、始終、北に現れ、どの星が、いつも、日没後に、西に現れる、といふことを心得てゐた。それゆゑ、それらの星を目じるしにして行けば、東西南北がわかるわけ、と知って居たので、只一念に、それをたよりに、駱駝に、鞭を加へました。

かうして、方角をさぐりく行く中に、

鞭

夜は、ほのぐと明けた。見ると、沙の上に、近頃通つたらしい駱駝の足跡がある。これに、力を得て、南へく、と行くと、その日の夕方、遙か向うに、ぼんやりと、火影が見える。急いで、往つて見ると、一群の隊商が野宿して居た。アリは嬉しく、早速駱駝からおりて、一同に向ひ、ありし事どもを語り、どうぞ、同伴させてくだされ、と頼みました。

火影

*

同伴

四十三
富山月三

一同は、アリのけなげな話に感心し、心よく、同伴を承諾するうち、ぢやらくと響く鈴の音と共に、南方から、また、一群の隊商が、到着したが、そのうちに、思ひがけなくも、アリの父がまじって居た。

※ 郷里 ※

聞けば、父は、スエズに居て、アリの來るのを待ちわびて、ちよど、郷里へ歸らうとする連中あるを幸に、迎ひかたぐ、出かけたのであった。思はず逢うた親子の悦

悉

びは、どんなでありましたらう。

かくて、アリは、父と共に、樂しき旅行を終へ、やがて、恙なく、我が家に歸り着き、始終の話を、くはしく、母親に話しました。

第二十課 埃及のピラミッド

亞弗利加の東北端に、埃及といふ國あり。此の國は、五千年以前、既に、開明國を以て、聞こえたりき。名高きピラミッドは、

富山屋藏片

王廟

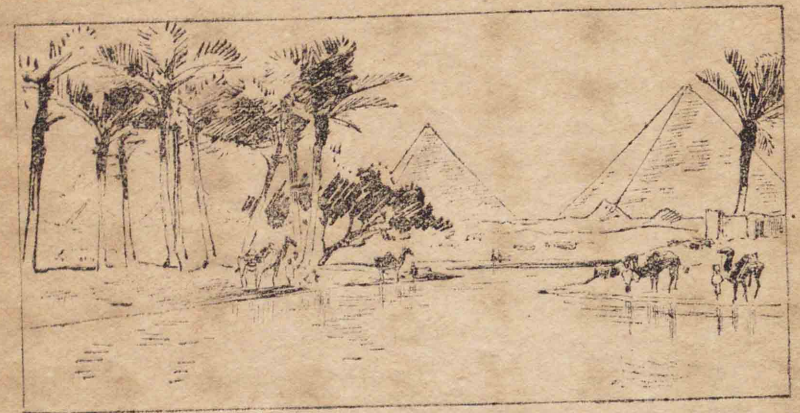
其の頃に造られしものにて、歴代の王廟なり、といふ。

*煉瓦

ピラミッドは、悉く、花崗石、又は、煉瓦より成り、横より見れば、大なる金字形を成す。故に、或は、金字塔とも稱す。其の數、七十餘基にて、最も大なるものは、ナイル河の西岸にある三基中の一なり。高さ、四百八十七尺、巍然として、空に聳ゆ。底徑は、七百六十八尺、面積一萬五千餘坪を蔽ふ。

巍然
底徑

* * *



其の積み重ねたる石は、一個にして、重量、數千萬貫に及ぶものも少からずといふ。

おもふに、之れを築造するには、一萬人餘の人の力と、三十餘年の日子とを費したりしならん。其の規模の雄大なる、支那の長城と

續大 四十五

偉觀

共に、土工の偉觀なり。

此のピラミッドの内部には、深く、地下に

*

設けたる數多の室あり。是れ、王家一門

石柩

の石柩を安置せる處なり。石柩の中に

は、ミイラとて、ミイラ包被にて包みたる

死屍

死屍を藏す。ミイラ包被にて包みたる

死屍は、三千年以前のもつと雖も、腐敗す

るに至らず、發掘して、包被を取り去れば、

今、なほ、其の面貌、生けるが如し。

*

埃及には、ピラミッドの他、方尖塔、女面獅
身像などいふ、珍しき建設物の殘在せる
もの、頗る多し。

第二十一課 物價の事

假

假に、米一俵は、五圓にて買ふべく、麥一

俵は、四圓にて買ふべし、とせば、米と麥と

の間に、位の差あるを見るべし。此の例

にては、米の位、五にして、麥の位、四なり。

*

位は即ち價なり。絹布の位は、木綿よりも高し、故に、其の價も貴し。金銀の位は、鐵よりも高し、隨うて、其の價も貴し。

* 需要
物の價の異なるは、主として、需要、供給の關係より來る。供給とは、品物の製造高を云ひ、需要とは、之れを買ひて、消費する力をいふ。買ふ力、餘りありて、製造高不足なるときは、品物の價高く、品物多くして、買ふ人、少きときは、品物の價低し。

* *
需要あるもの、必しも價あるにあらず、暑に苦むとき、誰れか、涼風を欲せざらん、然るに、涼風には價なし。錢を出だして買はずとも、天然の供給餘りあればなり。天然の供給餘りあれば、需要は大なるも、價なきを定めとす。是れ、物に賣買の價と、天然の價との別あるに由る。米麥などは、供給に限りあれば、賣買の價ありて、金錢と交換すべく、清水、涼風は、天然の

價あれども、供給餘りある故に、賣買の價なく、隨うて、金錢と交換すべからず。

但し、通例は、供給餘りあるものも、處がらに由りては、價を生ずることあり。井を穿ち難き土地などにては、飲用水得易からず、飲用水は、すべて、他處より荷ひ來る、隨うて、水一荷につき、何拾錢といふ價を生ずるなり。鈴蟲、松蟲などが、田舎にては、價なけれど、捕へて、都に持ち來れば、

若干の價を生ずるが如し。

第二十二課 貨幣及び爲替

補 世の中、未だ開けざりし頃には、甲の人と乙の人とが、不足を相補ふ場合あるも、物と物とを交易するのみ、今日の如く、貨幣を用ふることなかりき。されど、かくては、不便なるが故に、人智の進むにつれて、遂に、一種の品をえらび、之れをもて、あ

らゆる品物の代りとなし、廣く通用することとなりぬ。これ、貨幣の起原なり。物の價格は、それ〴〵に異なるゆゑ、貨物にも、段等あるを要し、金貨、銀貨、銅貨等の別を生ぜり。同種の貨幣中にも、また、段等あり。

貨幣の代用として造られたる物を、紙幣となす。紙幣は、金銀と交換せらるべき筈のものなり。

貨幣、紙幣は、便利なるものなれども、遠方の商人と取引するに、一々郵便などにて、現金を送り、又は、懐中して、旅行するは、荷物にもなり、紛失又は盗難の恐れあり。此の不便を除く爲めに、爲替といふ者あり。

爲替とは、遠方へ、金銭を送る折などに、便宜の銀行又は郵便局へ、現金を拂ひ込みて、爲替券といふ證書と引き替へ、それ

を封入して、先方へ送り、あなたの爲替取扱所にて、其の券を、現金と引き替へしむることをいふ。

旅行中などに、至急の需要起こる時、普通の爲替にては、間に合ひ難し。さる場合に、電信爲替といふあり、こは、電信にて、金高を言ひ遣るなれば、最も速かなり。

國語讀本 卷三 終

高等科
生徒用

明治三十三年九月二十九日印
 明治三十三年十月二日發
 明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷
 明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

(國語讀本高等小學校用)

價 定	
卷一金拾八錢	卷五金貳拾貳錢
卷二金拾八錢	卷六金貳拾參錢
卷三金貳拾錢	卷七金貳拾參錢
卷四金貳拾貳錢	卷八金貳拾四錢

著 者 權 所 有

發 賣 所

東京市神田區南乘物町拾番地
 帝國書籍株式會社

著 述 者 坪 内 雄 藏

東京市神田區裏神保町九番地

發 行 者 合 資 會 社 富 山 房

合資會社富山房社長

代 表 者 坂 本 嘉 治 馬

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

印 刷 者 仁 科 衛

東京市神田區南乘物町拾番地

注 意

- (一) 本社出版の書籍は専ら堅牢ならんことを期し常に紙質を撰び調製に注意致し居り候へども多數の中或は粗製のものなしとも申しかね候。萬一かくの如きものこれあり候はば御手数數ながら御注意を煩はしたく候然る上は必ず無代價にて堅牢なるものと御引換申すべく候
- (二) 本社出版の書籍はこれに相違の事實御發見相成り候はば御一報下されたく候
- (三) 本社出版の書籍は本社へ直接御註文の分に限り書籍部數の多少に係らずその運賃の悉皆を本社にて負擔いたすべく候

Handwritten scribble at the top of the left page.

Handwritten numbers and scribbles at the bottom of the left page.

Vertical text on the right edge of the book, including '富山房' and other characters.

